

時空管理局史別冊

魔法少女リリカルなのは StrikerS 考察

# パクス・ミッディニカ

- BloodyWorks -

# 1. なのは宇宙論

次元の海に、人々の生活を営む世界が島のように浮かんでいる。これが魔法少女リリカルなのはシリーズの作中で語られた、時空管理局の「管理」する最もマクロな世界の姿である。この世界においてミッドチルダや地球はそれぞれ独立した「次元世界」として描かれており、諸々に固有のナンバーを振られている。例えば地球は97番（第97管理外世界）であり、割り振られているナンバーは割と大きめだ。これは地球がミッドチルダから遠く（次元航行艦で数ヶ月）、管理局によって発見されたの時期が遅いことによるのだろう。これに対して時空管理局に就職している登場人物達の出身世界はナンバーの若いものが多い（例：ヴァイス＝第4管理世界、キャロ＝第6管理世界）、古くからミッドチルダ等と交流があったことを伺わせる。

ちなみにStrikerS本編の舞台となっている「ミッドチルダ」もこの一つの次元世界の一つであるが、登場人物の口ぶりから推するとどうやら同時に本局等の置かれている「惑星そのもの」の名称をも示しているようだ。ここで一つ重要な疑問が出てくる。ミッドチルダと呼ばれている世界は一体どこまでが「次元世界としての」ミッドチルダなのだろうか。一気に結論に持っていくと、作中の雰囲気を見る限りでは「二つの月」を従えた惑星系程度の範囲が次元世界としてのミッドチルダであるように思われる。StrikerS最終話でスカリエッティ等が収監された軌道上の拘置所についての表現などからも次元世界＝惑星系一つ程度に相当すると見て間違いないだろう。

このあたりは経済的な理由を考えると非常に納得しやすい。時空管理局の管理する世界はロケットを使用した星間航行技術に乏しく、星間ロケットを使って可住惑星と可住惑星の間を行き来する事が出来ないのだ。そのために個々の惑星は地理的に隔絶しており、それぞれが一つの「次元世界」と認識されていると判断できる。そもそも彼らの間では既に「次元空間」を介して低コストで他の惑星と行き来する技術が確立されている（Aランク以上の魔導師に至っては船を使わず人力で行き来している）ため、新たな資源や可住惑星を求めて星間空間を渡って行く技術を開発する経済的な魅力が乏しいのだ。社会的需要が無ければ大規模な資源とインフラを必要とする技術は発展しない。

この推論をもう一步進めると、この「次元世界と次元空間」という世界観の新たな姿が見えてくる。一つの次元世界が一つの「惑星」であるならば、次元空間を「ワープ空間」と置換しても世界観的に全く矛盾が生じないのだ。「第97管理外世界からミッドチルダ世界への魔法転送」を「地球からミッドチルダ星へワープ」と書く途端にSF的雰囲気が蔓延してくるが、本質的に見て両者に異相は存在しない。アースラはワープ航行で星から星へと移動できる宇宙船と言ったところだろうか。ワープ航路によって連絡された惑星国

家連邦     それが次元空間を介しないで見たなのは達の世界(以降便宜的に**時空管理局世界**と呼称)の実態なのである。

なお、仮にこの仮定が間違っており「一つの次元世界」が「一つの宇宙全て」であると解釈した場合、途轍もなく都合の悪い事態に陥ってしまう。一つの次元世界が広くなりすぎて、なのは達が宇宙服無しで降り立てる惑星を探索し移動するだけで莫大なコストが必要になってしまうのだ。第     世界と銘打って作中に出てくる場所が全て(有人・無人はともかくとして)固体の大地を持つ、地球に近い環境を持っている事からもこの可能性は低いだろう。

## 2. 惑星ミッドチルダ

ミッドチルダ式魔法の発祥の地であり、おそらく時空管理局世界の中心的な地位を確保している惑星(次元世界)がこのミッドチルダである。惑星首都はクラナガンであり、同市には時空管理局の地上本局やなのはたちの所属する機動六課の駐屯地も存在する。

### 2.1 テクノロジー

地球におけるアメリカ合衆国のように、全般的に時空管理局世界でも最高水準の魔法文明であると考えられる。名前のとおりミッドチルダで発祥したミッドチルダ式魔法はその他の次元世界の魔法技術を全てレアスキルや伝統芸能扱いにしてしまうほど圧倒的なシェアを誇っており、その技術的アドバンテージは計り知れない。StrikerSの時点ではベルカ式魔法が復権してきているとはいえ、これが本来の(古代)ベルカ式ではなくミッドチルダ式魔法の元で復元された(近代)ベルカ式魔法であることからこの優位性は明らかである。

### 2.2 経済・社会情勢

StrikeS 本編を見る限りでは健全な経済状態とは言い難いだろう。何しろ高層ビルの立ち並ぶ絢爛豪華な商業区画から一歩路地裏に入ると再開発もされずに放棄された広大な「廃棄都市区画」なるものが存在(実際にはミッドチルダ市内という舞台でなのは達は何の気兼ね無くドンパチできるよう脚本化が**適当に取ってつけた舞台背景**なのだろうが、ここ

では真面目に受け取って考察することにする。というか A's までの「結界」という便利設定はどこへ行った?)するのである。想像してみたい。時空管理局地上本局のお膝元、首都におかれた機動六課隊舎から休暇のティアナとスバルが遊びに出かけた先の路地裏には広大な廃墟が広がっているのだ。設定上は StrikeS 冒頭の空港事故による物(その割にそこらじゅうに在る気がするが・・・)らしいが、それから 4 年も経ってもあの有様なことから異常である。これではミッドチルダが経済的に破綻しており、復興資金にも事欠いていると見られても仕方がない。また一般市街地の高層ビルが芥子粒に見えるほど巨大な時空管理局地上本部ビル(StrikeS 第 1 クール OP 参照)から推測するに、軍事費(時空管理局関連費用)にミッドチルダの資金・資材の殆どが注ぎ込まれ、民需が極端に落ち込んでいるとも考えられる。下手をすると大艦隊の建設のために国家予算の半分を軍備に注ぎ込んでいた 1920 年頃の大日本帝国よりも更にひどい財政状況ではないのだろうか。劇中の雰囲気からするとミッドチルダの政界でも時空管理局地上本局の影響が極端に強い事が察せられるし、場合によるとミッドチルダは時空管理局による軍政下、もしくはミッドチルダという世界そのものが時空管理局の直轄領なのかもしれない。

また、ミッドチルダは日本のような国民総中産階級的な平等社会とは無縁の超格差社会である。劇中では無人の廃墟として描かれているが、あの廃棄都市区画と呼ばれる一帯は**事実上のスラム街**なのではないだろうか。社会資本の投下が遅れ、あるいは裕福層の逃げ出した旧市街地がスラム化することは割と良くあることだ。例えば韓国首都ソウルなどでも、高層マンション群の立ち並ぶ団地の山の反対側に古くからのスラム街が残存していたりする。

そもそも魔法技術が全盛のミッドチルダでは、先天的に持って生まれた魔法資質によってその後の人生の大まかな方向が決定されてしまう。魔力とコネがあれば小学生でも時空管理局に就職できる(9 歳時のフェイトについて「その魔力ならどの職も選び放題」という会話がある)し、19 歳で中佐に、一人目の子供が生まれたばかりの 25 歳で提督(将官)に昇進できるのだ。一方魔法を使えないと、娘の年齢から考えて 40 歳前後(あの白髪からしてもっといっているかもしれない)のゲンヤ・ナカジマで 3 佐とかなり遅い昇進スピードだ。もっと極端な例を出すと管理局に 40 年勤務し、自らの才能と派閥闘争で出世レースを勝ち上がったエリート中のエリートであるレジアス・ゲイズ中将(享年 54 歳)と 25 歳のクロノ提督(彼も**チャイルド・ソルジャー**から始めた十数年に及ぶキャリアを持っている訳だが、それでも極端な昇進速度差だ)が階級的にほぼ同等という途轍もないことになっている。クロノの両親であるクラウドとリンディも優秀な魔導師で若くして提督に任ぜられているあたりに、魔力保持者の立場が極端に強い時空管理局世界というスタンスが端的に表れている。レジアスが魔術師を嫌悪するのも当たり前である。

「軍隊は社会の縮図」という言葉がある。例えば階級社会だった一昔前の欧州ではそれ

を反映して士官は貴族、平民は兵士という住み分けが確固なものだった(第二次世界大戦時でもそうだった)し、逆に昔ならエリートと同義だった大学卒の人材が溢れ変える現代日本ではその大卒者が平気な顔で二等兵になっていたりする(学歴だけで考えれば士官候補生としても入隊できる)。この言葉は時空管理局のあるミッドチルダでも当てはまるであろうから、時空管理局の極端な魔導師優遇主義がミッドチルダ社会においてごく自然なものであることは議論の余地もない。魔法を使えない成功者であるレジアスですらこれなのだから、ミッドチルダ社会全般には魔力を持たない故にドロップアウトした人間はいくらでも居るだろう。「指先一つで人を殺せる質量兵器はおかしい」と高説賜るフェイト・ハラオウンさんは指先一つで町を潰す超絶魔力を持つ、云うなれば**エリート魔法貴族階級**の代表のような人物であるが、彼女の考え方そのものが魔法を使えない人の立場があらゆる意味で憐い事を如実に物語っている。個人の努力ではなく先天的に持っていたもので人生が決まる社会、それは日本のマスコミが好き好んで用いるそれとは全く異なる、真の意味での格差社会である。「廃棄都市」と名づけられ魔導師たちから存在を抹消されたスラム区画で勇ましく戦う機動六課課員達の中継映像のフレームの外には、決して描かれない社会から落伍した非魔法使い階級の姿があるに違いない。

## 2.3 二つの月

ミッドチルダは特異な惑星系である。二つ存在する「月」は大きさだけを見てもそれぞれミッドチルダ本星の直径の半分、三分の一と極めて大きい。これは惑星と衛星二つと呼ぶよりも、三つ子惑星と表記すべき大きさだ(太陽系では冥王星 カロンが双子惑星と呼ばれている)。ここまで大きさに差がないと最早惑星の周りを衛星が回るという常識的な星系の姿をとらず、二つの星が「互いが互いの周りを巡る」形になってしまう(事実冥王星とその衛星カロンはそうなっている)。

更にこれら二つの「月」はかなり歪んだ楕円軌道を描いて周回しているため、かなりミッドチルダ本星に近い位置にまで接近する軌道をとっている。StrikerS本編の空に巨大な月が二つ浮かんでいる構図が良くあることから判るとおり、おそらくロシュ限界(本星の潮汐力で衛星が破壊される限界距離)ぎりぎり近くまで近づいているのだろう。だがこれだけ頻繁に大質量の衛星が近づいたり離れたたりしては、衛星は言うまでもなくミッドチルダ地上も重力変動の影響を大きく受けている事は間違いない。ミッドチルダの潮の満ち引きは確実に巨大な二つの月によって地球とは比べ物にならないほど激しく複雑なものになっているだろうし、常に重力変動によるストレスを受けるプレートが頻繁に火山の噴火を起こさせている可能性もある(木星・土星にはこの種の火山衛星が存在する)。近未来魔

法文明ミッドチルダの成立は、案外このような苛酷な環境で生存するために人類が死に物狂いで魔法技術を発達させた成果なのかもしれない。

またミッドチルダの過酷な歴史を証明するもう一つの要因として、惑星ミッドチルダを取り巻くリングの存在がある。リングの構成物質は基本的に衛星に由来すると考えられており、太陽系では土星などに衛星の火山から噴出した物質によってリングが形成されている例が見られる。しかし、ミッドチルダの場合はリングの軌道上に衛星が存在する描写はない。これが示すところは明らかである。衛星が完全に碎かれてリングに還元され、軌道上から消滅してしまったという事だ。しかも本編 21 話冒頭の映像を見る限りではリングの公転軌道はミッドチルダの赤道上空を通っておらず、その上かなり楕円形に近い形状をしている。このような歪なリングが形状を維持できる寿命は通常のリングより更に短いと考えられる(真円系のリングでさえ構成物質の供給と外部重力による安定化がなければ数万年で雲散霧消してしまうとされる)から、それこそリングの形成 衛星の崩壊という惑星規模の大事件が発生したのが有史以降という可能性も十分に考えられる。

そうなれば軌道が交差するという本来ありえない「二つの月」の無茶苦茶な軌道にも納得がいく。天体は常に周囲の天体の重力の影響を受けているから、近い位置にある二つの天体は安定な軌道・安定な周期をとって巡っていかねばすぐに軌道を乱されてしまい、あらぬ方角へ弾き飛ばされたり、衝突したり、主星(この場合ミッドチルダ)に落下したりしてしまうのだ。こうした点から察するに、本来三つの衛星を従えて安定に過ごしていたミッドチルダ系は「ごく最近」次元振動が何かの影響を受けて衛星の軌道がかき乱され、重力的な均衡を完全に欠いてしまったのだろう。最終的に最も内側の一つは消滅して塵のリングとなり、生き残った二つは今なお不安定な軌道を巡る状態で年月を過ごしているというわけだ。この大事件が時空管理局成立以後であるならば、管理局の手によって衛星が粉碎処理された可能性も十分に考えられる。もしかすると StrikeS の数年前にはミッドチルダにディープインパクトしようとする**衛星をスターライトブレイカーで爆砕するの****はさん**、という場面があったのかもしれない。とにかくにも、この不安定なリングから弾き出されてミッド地表に落下してくる衛星の成れの果ては今でも腐るほどにあるだろう。しかし質量兵器を持たず、アルカンシェルを搭載した戦闘艦艇の常駐もない(そのためスカリエッティ事件では本局から艦隊を呼ばなくてはならなかった)ミッドチルダ地上本局にはこれに対処する常識的な手段は存在しない。最もストレートな対応策 貴重な空戦魔導師を集めて防空部隊を編成し、重要な空域全てに貼り付ける 是政治的な問題(地上本局の所望する優秀な魔導師の多くは次元航行隊にとられてしまっている)で実現不可能なのだ。ミッドチルダ地上の平和の守護者たるレジアス中将が、アインヘリアルなる大型魔法対空砲の導入に腐心していたのも十分に頷けるのである。

### 3. 時空管理局

次元空間と次元世界を「管理」し、警察・消防・司法・史跡保護・産業技術管理といった極めて広範な権限を持つ時空管理局は劇中における最も巨大かつ強力な惑星間組織である。その活動範囲は惑星地表部から惑星間の交通路となっているワープ空間(次元空間)まで幅広いが、指揮系統としては各惑星地表に駐屯して活動する地上部隊(陸軍)と艦艇を基本とする次元航行隊(海軍)の二つに分かれている。なお劇中では陸海空の三つが言及され、陸にはやて、海にフェイト、空になのはがそれぞれ該当していたが、「空」についてはただ空中戦闘のできる陸上部隊というだけで、本質的には単なる「陸」のエリート部隊である。

#### 3.1. 内部対立

巨大な組織故だからだろうか、管理局内部には多くの対立が存在する。最もわかりやすい部分では(軍隊では古今東西を問わずありがちな)陸海の対立で、劇中におけるレジアスの台詞からも予算や人材確保の点で「海」と「陸」が激しい対立関係にあることが見て取れる。また前述したとおり特権階級化している魔導師と非能力者の対立も根深いと考えられ、管理局内部はそれらの利害一致によって集まった派閥によって動かされていると考えても過言ではない状態と化してしまっている。

StrikerS 本編のストーリーは一見した所なのはたち機動六課とスカリエッティー味の戦いであるが、最も根源的な部分はこの**管理局内部の派閥抗争**といっても過言ではない。一方の役者は「過ぎた力」である大型魔法兵器や戦闘機人の実用化を推進するミッドチルダ地上のレジアスを筆頭とする一派(**レジアス派**)。そして他方が次元航行部隊のクロノやリンディ、そして聖王協会のカリムが所属するグループである。こちらは明らかに主要な人物が(管理局内部には僅かしかない筈の)超高ランクの魔導師ばかりで構成されていることから、高ランク魔導師の共通権益を代表する存在(**魔導師派**)と受け取ることもできる。魔法少女が主人公のアニメだけに作中ではレジアス一派が敵役として描かれているが、もちろん実態はそんな単純なものではない。

まず始めに触れるべきこととして、レジアス本人の行動原理から考えてみよう。彼は非常に強固な行動目的を持つ人物であり、その目的は回想シーンにおける若き日から現在に至るまで一貫してミッドチルダ地上の平和の維持である(権力の階段を登る過程で得た政界・産業界とのコネクションは当然在るようだが)。そして彼が若かりし日に嘆いたとおり、

その目的が果たされない理由はかなりの部分がミッドチルダ地上本局の確保できる予算と人材の不足にあった。しかし嘆かわしいことに、親友のゼスト違って彼に魔法の素養は皆無。これでは現場の最前線で地上の平和を直接的に担う事はとても出来ない(魔法不能者の割に部内で武闘派と呼ばれるからには、無理をして武装局員として働いていた可能性も皆無ではないが)。そこで彼は管理局内部における自らの地位を高め、予算配分や人事の面から地上の治安維持能力を高めることで自らの理想を実現しようとしたのだ。組織人としては非常に真っ当である。また彼の才覚は政治力を用いて治安維持要員である優秀な魔導師の確保しようとしただけでなく、魔導師に頼らない治安維持手段の構築を目指していたという点でも際立っている。最終的には皮肉にもそれが命を失う直接原因になった訳であるが、戦闘機人などは本来レジアスの理想のために(政治的な意味で)作り上げたモノと解釈しても過言ではない存在だ。派閥の目標として高尚な理想を掲げ、それに向かって邁進していた(個人の人格としては強面で灰汁の強い)レジアスに強い支持が集まっていたのも、その行動の首尾一貫さによる所が大きいのではないだろうか。

一方で次元航行隊の魔導師達の派閥である。彼等の行動原理はレジアスとは対照的に全く持って理解しがたい。確かに魔導師派はカリムのオカルト予言を元に機動六課という臨時部隊を設立して対処に当たったわけだが、これ自体が地上本局と人事面で協力せずに独自に対処するという意思表示であり、事実事件終結で用済みとなった六課は解体されてしまっている。レジアス派とは逆に次元空間の平和を第一に考えているというわけでも無さそうであるし、彼等がどうして管理局内部に権力を保持し、レジアスの動き(ミッドチルダへの人材・資金投下)に対抗しようとしているかという動機は全く作中では語られていない。だが一ついえることとして、時空管理局には魔導師と魔法不能者の間で(兵隊レベルは元より戦闘スキルを必要としない指揮官クラスになっても)途轍もない昇進スピード差があり、高レベル魔導師は確実にエリートグループとして管理局内部で貴族階級化している事は間違いない。魔導師派の行動原理、その大元は結局この昇進面の優位や部内での影響力という既得権の維持向上なのではないだろうか。

彼等にとって最大の武器は何といっても自分達、優秀な魔導師そのものだ。物理兵器が全廃されている時空管理局世界では個人レベルの武力(ハイレベルの場合戦略兵器級の存在にすらなりえる)はほぼ魔導師のスキルに依存しており、それ故にその動向に高い影響力をもつ魔導師達自身のグループは派閥として極めて強大な権力を得ることが出来る。そのため彼等は優秀な魔導師の派閥への囲い込みに熱心だ。管理外世界の人間であるなのは入局はもとより、普通であれば年単位の拘置と裁判が必要な重犯罪者であるフェイトや八神一家を司法取引で速やかに取り込んでしまったあたりは彼等魔導師派の思惑が絡んでいると見て間違いないだろう。しかもご丁寧に、ナンバーズまでもを派閥の駒として取り込んでしまっているのだから恐れ入るばかりである。レジアスらからみればこれこそが地上



戦力の枯渇の根本的原因であるのだが。

以上のような状況であるから、両者の関係が永遠に平行線なのも当たり前である。レジアス派からすれば優秀な魔導師を地上に配置することが自らの理想達成の第一歩となる。だがこれは魔導師達からすると自分達の立場が弱められ、無能力者に顎で使われるようになることを意味していた(それ故にカリムの予言に対し、彼等は完全に派閥の意のままに動く機動六課を編成して対処しようとした)。そして魔導師達の妨害による戦力増強の遅れに業を煮やしたレジアス派が量産可能な人造魔導師や戦闘機人、アインヘリアルの開発に乗り出した事は、魔導師にとっては自らの存在価値が下落し、特権的地位を失うことを意味する。

このように StrikerS のストーリーの大本には**魔法不能者の改革派(レジアス派)による、貴族化した保守派(魔導師派)の既得権への挑戦**というより大きな命題が見え隠れしている。表面的には改革派のジョーカーであったスカリエッティ一味の暴走と鎮圧、レジアスの暗殺による改革派の崩壊という経過があった訳だが、本質的な部分は時空管理局内部の派閥抗争によっているのだ。そして更に悪いことに、レジアス派の目指していた理想、ミッドチルダ地上の治安向上という点ではこの事件は全く成果がなく、その推進者であったレジアス派が消滅した事で逆に後退してしまった可能性が高い事がお分かりいただけるだろうか。序盤で語られた『部隊内の保有魔術師ランク制限』という制度もレジアス派の「人材囲い込み阻止」という目的にとって都合のよい規約であり、おそらく彼らが主導して制定したものであるだろうが、それも魔力封印という本来犯罪者の拘束に用いた裏技(これは派閥の都合で魔導師の才能をドブに捨てるという、外から見れば非難すべき非生産的行動である)を編み出した魔導師派によって有名無実化されてしまっている。その上人材不足を埋める諸々の技術は破壊されるかスカリエッティの処分によって封印され、引き続き高レベル魔導師の個人スキルに頼っていかざるを得ない状況が確定的となった。レジアスらの希望であった戦闘機人達が魔導師グループの一員である宗教騎士カリムの元でメイドをさせられている(これも才能を派閥の都合で無意味な場所に囲い込む典型例だ)というサウンドステージXの後日譚は、その余りにも冷酷な現実の象徴ともいえるだろう。

## 3.2. 権力構造

このように時空管理局は各種の利権が錯綜した巨大組織であり、その行動主体は大きく派閥による所となっている。人事異動や部隊の改廃でも地上配備と次元空間配備という移動はあっても、派閥の垣根を越えることはなく全て派閥の内部で処理されてしまう。ミッドチルダ地上に設立された機動六課に至っては基幹要員のほとんど全てが「海」から出向

(移籍ではなく)して来た人間とその家族や友人、そして新兵、孤児で占められている**完全な魔導師派の私兵部隊**(保証人や運用助言者も全てクロノやカリムといった魔導師)である。

このような組織構造に対し、時空管理局の上層部はどうなっているのだろうか。これまでに作中で語られた設定としては時空管理局体制の創設者(ミッドチルダを中心とした新秩序を打ち立てた戦国武将といった所か)である最高評議会の三名、その下に時空管理局そのものの設立に大きく寄与した三提督がいる。ただし最高評議会は非常勤の助言者に近く、マスコミなどで衆目に露出する事実上のトップは三提督である。ちなみに脳のみで生存している最高評議会の肉体年齢は150歳以上、三提督も90から100歳程度にはなっていることは間違いない。おそらくそれより下の年代には派閥の対立を超えて組織全体をまとめる様なまともな人材がいらないのだろう。何しろ魔導師達は保守的な貴族階級化しているし、それなりの行動原理を持っているレジアスにしても魔導師達を全く手懐けられていない。だからこそ圧倒的な人望と実績を持つ老人達がいつまで経っても引退できないのだ。全く持ってご苦労なことである。

ナポレオンや織田信長の例を見るまでもなく、こういった個人のカリスマに頼って成立した組織の寿命は短い。果たしてこの状況で三提督が死去した場合、要石を失った管理局はどうになってしまうのだろう。派閥ごとの対立が高まって動きの取れない状況に陥るのか、それとも一転して魔導師たちによる一極的な支配体制が確立された新組織(つまりクロノやはやてが若くして組織のトップに立って独裁制を敷く)となるのか、はたまた管理局システムそのものが機能不全を起こして時空管理局体制が崩壊(この場合は質量兵器の復権もありえるだろう)してしまうのか。どちらにしろ管理局の未来は暗いと言わざるをえない。

### 3.3. ロストログァ管理の真意

ここで話題を変えて時空管理局の業務について考えてみることにしよう。無印当時のからの伝統的な時空管理局の業務としてロストログァの封印管理というものがある。StrikeSで加わった設定である質量兵器(地球における軍用兵器としてポピュラーな銃火器、ミサイル、NBC兵器など)の根絶もこれに関連するものといえるだろう。時空管理局はこれらを十把一まとめに危険なものと定義して封印し、代価技術として安全でクリーンな『ミッドチルダの魔法技術』を推奨してきた。この『ミッドチルダの魔法技術』というのが味噌であり、ミッドチルダを中心とする時空管理局体制の根幹を成すからくりの重要な歯車である。

つまり所管理局は「平和と安全のため」という錦の御旗の元、他世界の産業技術や魔法技術を片っ端から封印して回っているのだ。現在の時空管理局世界ではかつて隆盛を極め

ていたベルカ式にしろ、キャロの用いる召還魔法にしろ、ミッドチルダ式でない魔法技術はレアスキル扱いの伝統芸能(ベルカ式魔法の使い手は本編にも沢山居るじゃないかと思われるかもしれないが、彼らが使用するのはリバイバルされた近代ベルカ式であり、古代ベルカ式の使用者は非常に少ない)にされているし、ミッドチルダ人に制御できない高度な技術の産物(もしくは単に都合の悪いものは全てロストロギア認定されて隔離封印の対象だ。

質量兵器の根絶に至っては更に大きな影響力を持っている。これは新参の次元世界に対する直接的な反乱防止策である以上に、その世界の産業そのものを壊滅させる事になるからだ。軍事技術と民間産業技術は地球のようなタイプの文明では密接なスピノフで結びついており、それを封印されては産業全体が停滞しかねない。もし現在の地球が管理局によって管理される世界になったら、「質量兵器」と関連性の強い核関連技術と宇宙開発技術はほぼ確実に封印の対象となるだろう。クリーンでないという理由で化石燃料にばら下がる各種産業もその対象に入るかもしれない。そうなれば火力と原子力でほぼ全てのエネルギーを生み出している現在の地球はエネルギーの全てをミッドチルダの魔法技術(つまり、ミッドチルダのエネルギー産業資本)に頼らざるを得ないことになる。まさに植民地そのものだ。時空管理局の管理システムというのは、実はミッドチルダとその古くからの友好国が圧倒的に強い立場を保持し、新参の世界ほど半植民地化されるシステムなのである。

**バクス・ミッディニカ**(ミッドチルダによる平和)、管理が異世界にとって、時空管理局は「平和」の輸出国家ミッドチルダの尖兵そのものだ。

( 続く ? )

---

**Author : 野分 はるな**

はやて&リン萌えのサークル”BloodyWorks”文章担当。

ミッドチルダのディストピア具合が堪らないお年頃。

作中で好きなキャラは、**1 位** レジアス・ゲイズ、**2 位** ゲンヤ・ナカジマ、**3 位** リインフォース、**4 位** ジェイル・スカリエッティ、**5 位** 八神はやて

